

古代ローマ史プロソポグラフィ研究

高橋 秀

古代ローマ史の分野で、二十世紀における研究成果の中から、史学史上の話題になるものをあげるとするならば、プロソポグラフィを逸するわけにはいかないであろう。

小稿はまずプロソポグラフィの概要を述べ、次いで古代ローマ史のプロソポグラフィ研究の近年の動向を紹介することにした⁽¹⁾。前者については、イギリス史のストーンの適切な論述があり、後者については、モランの整理が有益である⁽²⁾。以下この両者の所論によって述べることにする。

一、プロソポグラフィ研究の概要

1 プロソポグラフィとは

この言葉はギリシア語のプロソポーン（人物）とグラフィア（記述）とを合わせたもので、身元調べとか人別帳と

かの意味になるが、日本語の訳語としてはまだ定着したものはない。この語は古典期ギリシアにおいては知られず、最初の用例は、一七四三年ゴドフレドゥスの校定したテオドシウス法典の巻末付録にみられるという⁽³⁾。

プロソポグラフィの実際の作業は、伝記資料の集成、あるいは総合的な経歴調査というべきものである。すなわち、対象とする社会に現われる人物について、生没の時と所、結婚と家族構成、住所、学歴、財産の額や源泉、職業と職歴、宗教など、一定の項目に関して、伝記資料を収集・整理し、それらをもとにして政治や社会の問題を考察するのである。

政治に関する考察としては、政治行動の根元を探る手がかりが、プロソポグラフィに求められる。たとえば、政治の修辭のかけにひそむ深層の利害関係、政治集団形成のさいの社会的・経済的な結びつき、政治機構の実際の働き、

行動の中心人物と脇役の関係、などの解明に、この作業が効果をあげる。また社会に関する考察としては、プロソポグラフィは、社会構造や社会的流動性、あるいは文化的・宗教的な変化と社会的な要因との関連、などを探るための基礎作業となる。

ストーンは、プロソポグラフィ研究に二つの流れが認められるとして、それらを選良派と大衆派と呼んでいる。選良派というのは、少数の指導者について、血縁や人脈を詳細に追うものであり、その手法は事例研究である。この場合、政治は少数指導者と多くの取り巻きたちとの相互関係として扱われることになる。大衆派は、多数者に関心を向け、事例研究よりも統計資料の活用をはかる。この場合は、選良の決断よりは、世論の動向に重きが置かれる。そこで社会的流動性や、思想と環境と政治的・宗教的行動との関係などが取り上げられる。こうしてこの二つの派は、研究の対象、前提、手法、目標を異にするが、個人や制度よりも、集団や組織に関心を寄せることにおいて、共通している。

2 研究の開花と当時の学術の状況

A 研究の開花

プロソポグラフィの研究は、二十世紀になって開花する。

治構造」(一九二九)⁽⁹⁾、サイム「ローマの革命」(一九三九)⁽¹⁰⁾、マートン「十七世紀イングランドの科学と技術とビュリタニズム」(一九三八)⁽¹¹⁾が刊行され、プロソポグラフィの研究が学界に受け入れられるようになる。

これらは伝記資料の蓄積を活用しており、マートンは「国民伝記事典」を、サイムはドイツのゲルツァーとミュンツァーの研究を、そしてネーミアは下院議員の伝記資料に関する百年余の蓄積を基礎にしている。ネーミアとサイムは、選良の事例研究を詳細に行い、親類縁故、仕事上の付き合い、恩典の貸し借りなど、人物の利害を解明した。ストーンによれば、この両者の研究は、プロソポグラフィを用いて歴史の重要問題の見直しに成功したものとして、特記にあたいする。

マートンの場合は、アメリカの社会学者として、この両者とは異なる手法を試み、事例研究よりも、統計にもとづいて集団の実態に迫ろうとした。彼は特定の政治行動よりも、心性を問題にし、親類関係や経済的利害よりも、思想的な立場に手がかりを求めたが、その考察は、なお選良の範囲にとどまっていた。

ネーミアとサイムは、その後の歴史研究に大きな影響を及ぼした。事例研究と統計処理はさまざまな分野に採用され、やがて立法機関における議員の活動の研究や、有権者

このような研究の基礎となる役職者名簿、系図、人名事典などが、長い間に蓄積されて、十九世紀末までに整理されてきた。たとえばイギリスでは「国民伝記辞典」(一八八五—一九〇〇)があげられる。古代ローマ史においても、碑文史料の集成が進行し、「古典古代学百科事典」(一八九三—一九〇六)や「ローマ帝国プロソポグラフィ」(一八九七—一九一八)⁽⁶⁾が刊行される。

さて歴史研究において、プロソポグラフィを用いて成果をあげた最初の人は、ストーンによれば、ビアードである。ビアードの「アメリカ合衆国憲法の経済的解釈」(一九一三)⁽⁷⁾は、合衆国憲法の成立を、建国者たちの経済的・階級的利害の分析によって論じたものである。この著には「憲法制定会議の議員の経済的利害」と題する章があり、選良の経済的な立場の解明を、立論の中心に据えている。

翌一九一四年にアメリカのニュートンの「イギリス・ピュリタンの植民活動」が出た。⁽⁸⁾これは一六三〇年代、チャールズ一世に反対するピュリタンの進出を明らかにするために、主要な人物の親類関係や経済的な結びつきを追跡したもので、ここではビアードには欠けていた親類関係の要因が取り上げられていて、プロソポグラフィ研究の活用を、一歩進めたものになっている。

このあとをうけて、ネーミア「ジョージ三世即位期の政

の投票行動の分析などの研究分野が開拓された。

B 第一次大戦後の学術の新傾向

ネーミアとサイムの著作が現われた一九二〇年代から三〇年代にかけての時期は、ちょうど歴史学の転換期に当たっていた。十九世紀以来の歴史学は、国制史や外交史の文書の詳細な研究によって、大きな成果をあげてきたが、第一次大戦前ごろから、従来の研究のあとを追うことに満足せず、国制の運営や外交の事に当る「人」に、考察の重点を移す試みがなされるようになった。先のビアードの著(一九一三)は、合衆国憲法を、その制定にたずさわった人物の利害から論じたものであった。サイムの著(一九三九)は、序文で、今や伝統的な歴史研究とは異なるゆきかたを採るべき時代が来ているとの思いを述べている。ネーミアは「アメリカ革命期のイギリス」(一九三〇)で、イギリス議会の態度を論じるさいに、「代表なくして課税なし」の政治理論を取り上げる代りに、当時の議会はアメリカ植民地のことがどのくらいわかっていたのか、議員の中でどのくらいの者が、植民地に行ったことがあり、植民地に関係を持ち、植民地の事情を知っていたのか、を問うた。

こうして「何が」よりも「誰が」が、問われるようになった。「誰が」を理解することは、その人物の属する制度の実際の働きを知るのに有効であり、政治の修辭のかけに

ひそむ本音を明らかにし、またその人物の業績の把握や文書の解釈に役立つと思われたのである。

このように政治史や政策に関する研究に新しい傾向が現われるが、その源流としての当時の知的風土について、ストーンは四つの特色をあげている。

第一は文化的相対主義である。諸地域間の交渉が密になり、文化人類学の調査によって、多様な文化の型が明らかにされ、人間の行動や社会の組織の見方が広げられた。

第二に、このような多様性をもたらす決定的な要因として、環境の条件が重視されるようになった。この特色は、当時の社会的ダーウィン主義や、またフロイドやエリクソンや行動主義の心理学について、指摘されよう。

第三には、政治家と政治体制に対する信頼の低下である。第一次大戦の災害を体験し、戦後秩序にも幻滅した多くの人びとにとって、政治家の行状は見え透いていた。歴史研究者は、過去の政治家についても、私文書などの検証によって、行動の動機を説明することができるであろうと考えるようになった。

プロンポグラフィ研究の開拓者においては、人間のとらえかたに悲観主義の陰が濃い。先のピアードの場合は、マルクス主義的な経済的決定論のおもむきがうかがわれるが、経済的決定論というものも、そうした悲観主義と関わって

いると思われる。保守的なネーミアとサイムの場合も、人物の心情や美徳を押しやって、もっぱら冷たい作業に集中している。

このような冷めた態度は、政治家に対してばかりでなく、政治体制に対しても、採られた。革命に対し、民主主義に對し、確信は揺らいでいた。ネーミアは、ジョージ三世によるイギリス国制の変革というような解釈をしりぞけた。

サイムは、アウグストゥスによるローマ共和政の改変について、道徳的な判断を下す余地を置いていない。このサイムの態度を評して、モミアノは、ちょうどタキトゥスと同様に、人間性に対する絶望のゆえに君主政擁護者になったものと云った。⁽¹⁵⁾ 選良を対象に取り上げながら、これらの研究は、冷徹に平等主義的に人間の真相をあばいているという意味深い指摘を、ストーンは行なっている。

二十世紀初頭には、政治学や社会科学でも成果があがりつつあったが、プロンポグラフィ研究の開始期には、まだそれらはあまり採り入れられていない。

さて選良派の歴史解釈の特色は、政治史の場面から、政党の綱領やイデオロギーの熱情をしりぞけ、代りに保護者と被保護者、頭領と手下の人脈を取り上げることである。古代ローマ史の分野では、テイラー⁽¹⁶⁾やベディアン⁽¹⁷⁾の研究に、そのことが見られる。イギリス史においては、ネーミアは、

政党の代りに「派閥」(コネクション)を十八世紀中葉の政治の中心的な組織原理とした。マクファレンは十五世紀に

関して、ほぼ同様な保護者と被保護者の関係を云い表わす語として「庶子封建制」⁽¹⁸⁾を用いた。ニールは、古代史から

「被保護関係」(クライエンテージ)の語を採り入れて、エリザベス期の政治を説明した。ニールは、ジェントリの間での集団形成が、近代における政党の働きに相当するもので、議会選挙の結果も主としてここにかかっていたと論じた。⁽¹⁹⁾ こうしてプロンポグラフィは、熱情や理想を無視するのではなく、むしろそういう厄介なものを中和させるためにこそ採用されたものである、というのがストーンの指摘である。

第四に、人類学が、家族や血縁に関心を集中させたことが注目される。ネーミアの十八世紀中葉イギリス政治の研究によって、家族や血縁の、政治的結合のきずなとしての潜在能力が、歴史学界で注目されるようになった。選良派の歴史研究でこのような結びつきが取り上げられたころ、折しも文芸のほうでは、ブルーストの「失なわれた時を求めて」や、その他の「家」の物語りが出てくるのである。

これらの傾向の中で、まず選良派の研究が開花した。これらの傾向に加え、社会科学、とくに社会調査法の進歩をうけて、やがて大衆派が伸びてくる。

3 プロンポグラフィ研究において注意の必要なこと

プロンポグラフィ研究の展開をかえりみると、これから先の可能性にも期待がかけられるが、またすでに限界や欠点も見出される。ストーンは今後の課題として、四つの点を述べる。

第一に、プロンポグラフィ研究は、史料の量と質によって制約される。多くの人物の伝記を調査するには、まず資料が十分になくなくてはならない。十六世紀に印刷術が普及し、識字率が向上し、記録文書を扱う国家機構が整備される以前には、文書の記録はとぼしい。また調査によって、わかる人物とわからない人物があり、わかる人物についても、わかる項目とわからない項目がある。したがって調査の結果わかった人物のわかった項目について、一般化には慎重でなければならない。

資料のありようは、社会的地位の低い者ほど、文書にあとを残すことが少ない。このため研究は、選良を対象とすることにがちである。下層の中では、既成の秩序に反抗して、取締りを受けた少数者だけは、例外的に資料の多いことがある。

また人間の生活の中で、文書の記録が残るのは、財産と家族構成に関することにほとんど限られる。財産の種類や

額や、その所有者の移動は、公私の文書に記録されること
が多く、また家族構成や結婚についても、同様である。
しかし経済的な利害は様々にぶつかり合うし、親類関係が
あっても対立抗争する例は少なくない。これらの基礎的な
項目の調査の結果の有効性については、限界があることを
心得なければならぬ。

第二に資料の分類の困難さがある。人間はさまざまな役
割を帯びて活動している。民族、宗教、政治活動、職業や
経済活動、社会的活動、性など、多くの分類が可能であり、
それらの分類は実際は人によって入り組んでいる。研究の
さいに分類を細かくすれば、区別が可能となることを、ひ
ととために扱ってしまう場合がある。作業の仮説の立てか
たと実際の作業とに関して、検証をおこなってはならない。

第三に、資料の解釈について、注意すべきことがある。

ある集団について情報が得られたとして、そのさい知り
えた部分が、その集団の全体についての無作為の標本であ
るかどうかが問題である。例として、十七世紀イングラン
ドの貿易事業への投資者の研究をあげると、未確認が三
四割程度であっても、もしもその大部分がなんらか一つの
部類に属するようなことがあれば、知りえた部分から引き
出された情報は、かたよったものにはすぎない。

もう一つ、対象とした集団が、その社会全体の中でどん

も、どんな政治体制のもとでも、寡頭政が陰にひそんでい
る、という⁽²³⁾。その通りではあるが、重要な変化がまず下層
において進行するということはありうる。

プロソポグラフィ研究のすぐれた成果として、サイムの
「ローマ革命」、ネーミアの「ジョージ三世即位期の政治
構造」、ニールのエリザベス期の下院に関する三部作⁽²⁴⁾をあ
げることができるが、これらには共通の、視野の狭さが見
られる。

サイムの研究では、ローマ共和政から帝政への移行とい
うのは、最上層における複雑な権力闘争の結果、アウグス
トゥスの周りに新しい選良が結集するにいたったことには
かならないという解釈がおこなわれている。彼はこのこと
を証明したが、保護者としての政治指導者に対する大衆の
要求は無視されており、実はこちらのほうが権力の移り変
りの根本にあったのではないかという点には、立ち入って
いない。政治の運動、とくに革命を、指導者の研究だけで
説明しきめることは不可能であろう。

ネーミアによる十八世紀の下院の運営に関する研究は、
従来の通説をくつがえしたが、そこではウィルクスやアメ
リカ独立戦争による民衆の感情のほとばしりを汲みあげる
ことはできなかった。ニールによるエリザベス一世と下院
の関係についての研究においては、ピューリタニズムの影響

な位置づけになるかに、注意しなければならぬ。例えば、
フランス革命の恐怖期に処刑された人は、貴族よりも、中
流以下の階層の者が多かったことが知られる⁽²¹⁾。しかし総人
口における貴族の割合は少なかったから、貴族が処刑され
る機会が、中流以下の者よりは多かったとみるべきである。
部分と全体の関係を注意する必要があることについて、

もう一つ例をあげる。ある集団の多数者が特定の階層や職
業の出身者である場合、それゆえに、そういった階層や職
業の多数者が、その集団に属すると考えてしまうことがあ
る。ストーンはここで、ジェントリの問題を引き合いに出
す。トレヴァー・ローバーは、一六四〇年代から五〇年代
にかけて、イングランドで権力を得た人は、古くからの土
地所有者の選良ではなく、もっと下層の「ただのジェント
リ」であることを明らかにした。そこから彼は、一步を進
めて、没落しつつあった「ただのジェントリ」が、農村に
おける主要な不満分子で、過激派の主要な支持者であった
と論じた。しかし実際は、「ただのジェントリ」の多くは
教会と王に忠実であった。クロムウェルを支えた独立派の
ジェントリは、非典型的な少数者であった。

第四は歴史理解にかかわる問題である。

(a) まず研究が選良に集中することは、歴史を支配層
を中心として見る傾向と結びつく。サイムは、いつの世に

の強さの見直しが必要となるであろう。ニールが明らかに
した貴族の保護関係の脈には、実はピューリタニズムが複
雑に絡んでいるのである。

(b) 次に、思想や心情をとらえることに、積極さを欠
いたことがあげられる。記録文書には、物質的利害と血縁
関係に関することが多く、思想や心情を吐露したものは少
ない。それに対応してプロソポグラフィ研究の扱う分野に
はかたよりがあり、またそのかたよりをやむを得ないとす
る傾向がある。サイムに対する書評で、モミリアノは、人
びとの精神的な問題への関心が、結婚問題より僅かしか顧
みられていないことに、不満を述べた⁽²⁵⁾。ネーミアに対して
は、バターフィールドは、人間は利害関係を収める容器⁽²⁶⁾で
あるだけではなく、思想の担い手でもあるのだと、論じた⁽²⁶⁾。

ネーミアもサイムも、思想や心情が利害とぶつかること
を、あまり重く考えていない。彼らは、政治の戦略よりは
戦術に関心を寄せており、原則や政策よりも術策で動く
「信念のない社会」を前提にしている。ネーミアの場合は、
彼の取り上げた十八世紀中葉は、イギリス史の中で争点の
極端にとぼしい時期であり、政治家が等質の集団をなして
いたことにおいても特別な時期であった。したがってネー
ミアとしては、彼の方法による分析に特別に適した時期と
階層を選んだことになる。同様なやりかたは、その時期の

以前についても以後についても、成果をあげることが難しいであろう。政治を利害集団の理論で説明することは、時と所によって、通用する場合もあれば、通用しない場合もある。それは、重要な政治の争点が少なく、イデオロギーの温度が低く、政治組織が寡頭政である場合に、適切な歴史解釈をもたらすことになるであろう。

(c) さらにもう一つ、プロソポグラフィ研究においては、政治の素材としての制度の枠組や、政治家が政策を形成する過程などが、不当に無視されることがある。バターフィールドによれば「われわれに与えられる話は、政府や議会の本領にかかわる段になると、にわかと言葉数も少なく、好い加減になる」という。各省庁における大臣の働き、政策や重要な決定のみなもと、政治論争の本身、政策や政治家に対する人びとの態度、議会討論のやりとりなどに対する関心はほとんどない。このような傾向は一種の職業病の症状ではないかということになる。バターフィールドのいう職業病とは、政治の本身の色分けがつかなくなることである。

選良派のプロソポグラフィ研究者は、人間の動機について割り切った見方を求め、行為のみなもととは、せいぜいあれかこれかぐらいに考えようとする。しかし人間の動機は単純ではない。人は、血縁、交友、経済、政治、宗教など

様々の要因によって動かされる。さらに人の態度と、その背景としての文化や民族や時代との関わりも、直接的であったり間接的であったり、様々の場合がある。

政治家の縁故が通用する次元の問題と、制度への取組みや政治の原則が問われる次元の問題とを、どうつなげるかということが課題になるであろう。

4 近年の研究の成果

プロソポグラフィ研究の近年の成果を述べるにあたり、ストーンは、自身の専攻領域である十六世紀から十七世紀中葉までのイングランドの宗教史、社会史、政治史に関して、一九五〇年代および六〇年代に発表された幾つかの業績を取り上げている。これらについては筆者の専門外の事になるので割愛し、論述の運びだけを簡単に紹介するにとどめたい。

まず英国の宗教改革に関しては、宗教改革以前の聖職者の状態についての研究があり、聖職者の教育やモラルや財政に関する考察が行われている。宗教改革期の主教たちについては、彼らの間での見解の相違を、彼らの教育や経歴の違いとの関連において考察する研究がある。修道士については、宗教改革以前の状態や、いわゆる解散後の状態についての考察がある。

宗教的急進主義に関して、ストーンは、ディケンズの「ヨーク管区におけるローラズとプロテスタンツ」(一九五九)⁽²⁸⁾を特にあげ、異端の裁判記録を通じて、この少数者集団の大きさ、影響力、社会的構成、職業上の特徴、地理的分布が明らかにされたと述べている。このような研究によって、急進的宗教思想の浸透についてのローラズの影響の強さが浮かび上がり、プロテスタント思想の伝播の様々の経路が明らかになったという。

宗教改革後の時期については、メアリ治世下の国外亡命者の研究がある。英国教会の成立期の聖職者のプロソポグラフィ研究は、聖職者のいささか落ち込んだ状態を映し出す。英国教会に対して、一方の側にピュリタンがあり、ピュリタンとはどんな人たちであったかの研究がなされている。また他方の側にカトリックがあり、一五六〇年代と八〇年代のカトリック教徒の比較が行われている。

社会史では、いわゆる「ジェントリ論争」が取り上げられる。これは、幾つかの研究の結論の一般化をめぐる論争であったといえるが、論争の過程で、地方的な詳細な個別研究や統計の活用によって、それぞれの仮説の当否のふり分けが行われるようになった。ストーンは論争の当事者であり、論争経過の要約を述べた著作もあるが、ここでは自身の著作については、注に記すにとどめている。⁽²⁹⁾

政治史においては、下院議員のプロソポグラフィ研究が進み、一五五九年から一六六〇年までの、ほとんどすべての議員について、情報がそなえられた。議員の数の増加やその原因についても、考察が行われている。調査によって、議員の教育程度や行政経験の向上と、ジェントリの比率の上昇傾向が認められる。また選挙の経過と結果の研究が進み、選挙人と被選挙人との関係の変化も、いくらかわかってきてきている。すでに一六四〇年以前に、選挙にさいして、宮廷を取りまく大貴族の影響力が低下し、代って地方の有力者の力が伸びてきている。地方や都市における地方的選挙のプロソポグラフィ調査も進み、一六四〇年代の終りには、所によっては、旧来の大貴族の勢力の後退、ジェントリや商人の進出が知られるようになる。

以上のような概観の結論として、プロソポグラフィ研究が有効なのは、対象となる集団が、範囲の明確で規模の小さいものであり、百年程度の期間に関して行われる場合であり、そして史料が多様な形で存在して、それらが互いに補い合えるような状態にある場合、しかも研究が特定の問題の解明に向けられる場合であるという。好例は、十六世紀初期のローラズとプロテスタント、十九世紀初めのキャプテン・スウィング事件の関係者の研究である。反対に、長い期間にわたり、多数の人物を取り上げて、容易に入手

できる印刷資料だけにたより、問題が絞り切れていない場合は、効果をあげることはできない。

5 展望

プロソポグラフィ研究は、今や成熟の域に達している。選良派の起りは、ドイツとアメリカにおいてであったが、発展はイギリスでなされた。その後はアメリカで研究が進み、大衆派の研究がさかんになっている。アメリカのプロソポグラフィ研究の進展の原因は、社会学と政治学の影響およびコンピュータの活用である。この傾向の中心となったのは、ミシガン大学に創設された諸大学共同の政治研究施設である。⁽³⁰⁾ ここには、一七八九年以来のすべての連邦議員の投票行動に関する情報が、収集・整理されている。また選挙研究者には、一八二四年以来のすべての選挙における郡レベルの選挙民の投票に関する資料がそなえられつつあり、しかも一七九〇年以後の国勢調査報告にもとづいて、各郡と州ごとの、収入、人種、宗教、その他の項目に関する情報と投票との相関が、たどれるようになっていた。またこれを用いて、アメリカ史の初期や他の国についても、統計資料の利用の機械化が進められている。

イギリスでは、アメリカとはちがった形で議会史の研究計画が進んでいる。一九五一年からネーミアが中心になっ

いくつかの項目の相関を調査するという作業は、コンピュータによって容易になった。機械が導入されたために、歴史研究の問題設定も、それに対する解答方法も、変るということを認めるのは、しのびがたいことではあるが、今後の研究の動向を考えるには、このような変化を見過すことは許されないであろう。

プロソポグラフィ研究の成功と普及にともなう危険について二つのことが指摘される。その一つは、大規模な研究たとえばニールのエリザベス期の議会の研究、ジョーダンの慈善事業の研究、ネーミアの議会史の研究などは、共同研究であり、主幹の定めた方針にもとづいて資料の調査が行われる。共同研究は自然科学系で当然となっているが、歴史研究を個人の独立した営みと考えてきた人びとの間では、若手研究者の研究主幹への依存の關係に問題を感じる者もある。

第二に、大衆派と選良派が、接近するよりも、専門分化が進み、一方はますます数量測定に、他方は個別的な事例研究に、走る危険があることである。コンピュータの導入は、両者の隔たりを増加させ、交流を困難にしている。さらに、一方のアメリカやフランス、他方のイギリスというような国による違い、近代と古代、あるいは人文系と科学系というような文化の違い、また事実と観念というような

て、すべての下院議員の伝記事典が作製されつつある。⁽³¹⁾ その初めの巻には、事例研究や統計による比較や政治的考察などが、置かれている。このイギリスの研究計画の特色は、財政的基礎が大学や研究所ではなく政府の所管にあること、伝記情報の利用の機械化は進んでいないこと、統計よりは伝記と事例研究に重点が置かれていることである。

近年のフランスの歴史学界は、新しい研究の開拓の中心をなしている。プロソポグラフィにおいては、数量計測の伝統にそって、大衆派の研究計画が大規模に進められようとしている。これにはバリの高等研究院第六部門がたずさわっている。

プロソポグラフィ研究がさかんになった理由の一つは、それが研究論文作製の要件に合致することである。研究者は、多くの資料に接し、資料批判、解釈、事柄の確認の作業を行い、各自の力量や制約に応じて、適当に論題をまとめることができる。このような作業は、資料収集のための資料収集という新型の好古趣味におちいる傾きはあるが、歴史知識の整理に役立つように、導かれてゆくことはできない。

第二の理由は、コンピュータの出現である。プロソポグラフィ研究の扱う資料の処理には、コンピュータは大きな能力を発揮した。多くの資料を集め、同一の規準で整理し、

哲学の違いが、両者の開きからんでくる。

しかしプロソポグラフィ研究の今後には、現在の歴史学界のさまざまな論題や技法を結合して、歴史研究の面目一新に寄与する可能性があるとして、ストーンは次代の研究者に期待をかけている。

二、古代ローマ史のプロソポグラフィ研究

一九六九年九月にボンで第五回国際古典学会が開かれ、その第六部会は「プロソポグラフィによるローマ史の解明」を課題として行われた。この機会およびその後をうけて、古代ローマ史のプロソポグラフィ研究史を整理するいくつかの興味深い論文が発表された。⁽³²⁾ 前述のストーンの論文も、ちょうどこの時期のものである。

一九八〇年八月にはブカレストで第十五回国際歴史学会議が開催され、その一つの部会で、古代ローマ史のプロソポグラフィ研究に関する報告が行われた。その時の報告の一つとして提出されたのが前述のモランの「ローマのプロソポグラフィ、その長所と短所」⁽³³⁾で、共和政期に関する研究を扱ったものであるが、この二つの大会の間の十年間における研究動向を要約したものとして有益である。以下は、

この報告をもとにして、述べていきたい。

1 研究の意義

モランは始めに、プロソポグラフィの一般的な説明を述べるが、これについては、前述のストーンの論述との重複を避けるため、省略する。ただモランによれば、プロソポグラフィは「方法」ではなくて、研究の対象をいうのであり、真実に迫るための新しい接近作業（アプローチ）とよぶべきものとされている。

さてモランは、プロソポグラフィがまずローマ史研究において行われたことの意義を考察する。プロソポグラフィというのは、伝記資料から成り立つが、伝記とプロソポグラフィは違う。プロソポグラフィを成り立たせる情報は、客観的な「冷い伝記」であり、社会における人間関係の連結点、すなわち親子関係、婚姻、血縁関係、また職業、官職、軍歴、および財産や収入の源泉や額などについての調査がまとめられるのである。この作業は、記録を扱う書記の仕事に似ている。

古代ローマでは、このような項目をそなえた台帳を作るのが、国家の最も重要な業務になっていた。五年ごとにローマでは、戸口調査が行われ、家長の申告により、各家の構成と財産を把握し、それにもとづいて市民の権利と

義務が定められた。ケンソルのもとに、そのような市民の構成と活動に関する基礎資料があったと考えられるが、後世には残っていない。プロソポグラフィ研究は、実はそのような文書を復元あるいは再現しようとする営みになるのである。モランはこれを、研究とその対象との適合とよび、ローマ史におけるプロソポグラフィ研究の意義を強調する。ローマ共和政期には、政務官職は任期一年、同僚制で、選挙を経て昇進が行われた。官職を歴任した選良は、元老院議員になった。昇進のためには、保護・被保護関係というような私的な関係の集積が不可欠であった。帝政期になると、皇帝のもとに階層秩序が固められるが、社会的流動性は保たれており、市民による選挙に代って、皇帝による選挙が、昇進のきっかけとなった。両者の社会の様相は異なるが、それぞれの時期について、社会の階層構成、社会的流動性、昇進の動機など、プロソポグラフィによる解明の目標は、そろっているのである。

2 研究の進展

ローマ史のプロソポグラフィの史料は、共和政期においては政務官表の類であり、帝政期においては、表彰碑や墓碑にみられる親子関係や官職経歴の碑文が主なものである。一八六三年から始まる「ラテン碑文集成」の刊行を推進

したモムゼンは、また「ローマ帝国のプロソポグラフィア」(一八九七—一八九八)⁽⁶⁾の編集に尽力した。モムゼンが帝政期のプロソポグラフィアを取り上げたのは、帝政期には文学史料による歴史叙述が乏しく、他方で碑文史料が豊富であると考えたからであり、共和政期については、文学史料によって政治の仕組みをたどることができ、碑文史料によって補強するには及ばないと、考えたのである。

一八九三年には「古典古代学百科事典」の刊行が始まり、ここには古代の文献や碑文に出てくる人名が、項目としてアルファベット順に、氏族ごとにとまとめて、収載された。このような労作が蓄積されてゆく間に、プロソポグラフィ研究は軌道に乗り、またそれと共にモムゼンの業績に対する批判もなされるようになった。

とりわけ重要なのは、共和政期の政治指導者層や、共和政期の政治制度の働きについて、見直しが試みられたことである。一九一二年に出た前述のゲルツァーの「ローマ共和政期の貴族」⁽¹²⁾は、指導者層の構成と、彼らが優越した地位を維持することができた根拠を、研究したものである。まずノビリスという言葉の意味を解明し、ノビリスとよばれた人の定義を明らかにし、コンスルの地位への昇進が、昇進した本人にも、その一族にも、大きな意味をもったことを論じた。モムゼンにおいては、共和政の名のもとに、

近代的な議会政治や政党の活動が考えられていたが、ゲルツァーは実態に迫ることにつとめ、指導者たちが権力を志向して、保護・被保護関係や交友関係などの人間関係をよりどころにして、地歩を固める様相を明らかにした。ゲルツァーの研究の新しさは、直ちには理解されず、半世紀を経てもようやく、その意義が認められるようになった。一九二〇年にはミュンツァーの「ローマの貴族の党派と家門」⁽¹³⁾が、貴族の勢力の根元は、政治制度を家門の力で取り仕切るところにあったと論じた。

ローマ史におけるプロソポグラフィ研究の成果が関心を惹くようになったのは、前述の一九三九年のサイムの「ローマの革命」⁽¹⁰⁾である。サイムの著が、ゲルツァーやミュンツァーの仕事よりも学界で注目されたのは、一つは学界に従来の歴史研究に対する見直しの気運が出てきていたこと、もう一つはフランスやイギリス、アメリカで社会史や社会科学への関心が高まっていたこと、そしてさらに著者の力量によるものである。

サイムのいう「ローマの革命」とは、二十年間(前四四—二三年)に権力と富が、一つの寡頭政的な貴族層から他の寡頭政的な貴族層に、力の行使を経て移行したことであり、著者の主題は、このような寡頭政的な貴族層である。モランはサイムの著の序文の一節を引用している。そこに

は、伝統的な見方にとらわれるべきではない、アウグストゥス研究の多くは彼をたたえているが、政治的成功を称揚したり、内戦の勝者を理想化したりすることはない、と述べられている。この序文が書かれたのは一九三九年六月である。当時のヨーロッパの政治情勢の中で、この言葉は一つのマニフェストであったとモランは述べ、「現在との対話」としての歴史研究のありかたを、ここに認めている。時代は制度や党派を単純には受取らないところに来ていたのである。

さて政治的変化や制度的変化をどう説明するか。それには、制度以前のものを探ねることが求められる。政治の争いの中にはっきりとは現れない諸力の中を探ることである。権力をめざして寡頭政貴族層の成員たちの間で競争が行われるという状況に対して、プロンポグラフィ研究は、この人びとの間に利害関係を見付け出そうとする。そのようなやりかたについては、批判も出た。激情や野心ばかりを取り上げて、世界に希望や理想がないかのようにではないか(モミリアノ)⁽¹⁵⁾、また指導層に注意が向けられ、下層が顧みられていない(カンフォラ)⁽³¹⁾などである。

このような批判はあったが、プロンポグラフィ研究は、史料に支えられているという強みを主張することができた。批判に対するサイムの考えを示すものとして、「人は持つ

ているものを使って、作業すべきである。」⁽³⁵⁾という言葉が、モランによって引用されている。

第二次大戦後にプロンポグラフィ研究は、欧米各国でさかんに行われるようになる。英語圏では、テイラーの「カエサル時代の党派政治」⁽¹⁶⁾(一九四九)とベディアンの「外地の被保護関係」⁽¹⁷⁾(一九五八)があげられる。これらはサイムの対象とした時代より前の時代を扱い、権力闘争をめぐる指導層の間での集団形成にかかわる人間関係を、ローマ政治史の解明の中心に置いている。またブローントンの「ローマ共和政期の政務官」⁽³⁶⁾(一九五二)は、まさに政務官表(ファステイ)の完成を期した基礎作業の結実である。ヨーロッパ各国でプロンポグラフィ研究が行われるようになるころには、研究の傾向にも変化が生じてきた。プロンポグラフィ研究に政治的選択の理由を求めるとは、特定の官職を取り上げて、その官職の変遷、官職体系の中の位置づけ、就任者ほどの辺りから出るか、就任者の家門の社会的昇進への意義などについて、情報が求められるようになった。こういう問題はローマ帝政期に適用しており、主な成果として、ブロム「ローマ帝政期の騎士のプラクラトルの研究」⁽³⁷⁾(一九五〇)、ヴィトクッチ「帝政期の首都長官の研究」⁽³⁸⁾(一九五六)、シャスタニョル「帝政末期ローマの首都長官」⁽³⁹⁾(一九六二)があげられる。

共和政期のプロンポグラフィ研究では、特定の社会層の特徴を描き出すものとして、スオラハティの「共和政期ローマ軍隊の士官」⁽⁴⁰⁾(一九五五)とニコレの「共和政期の騎士身分」⁽⁴¹⁾(一九六六)がある。

この間にプロンポグラフィ集成の刊行も進められている。⁽⁴²⁾こうしてプロンポグラフィの研究は、戸口調査の行われたローマ社会の伝統を受けて、およそ半世紀の間に、ローマ史の様々な研究分野において、採用されるようになった。

3 近年の研究の成果

近年のプロンポグラフィ研究の成果については、共和政期に関して、三つに分けて述べるのが適当と思われる。第一は政治分析の進展、第二は社会経済史の分野におけるプロンポグラフィの多様化、第三は様々な研究分野におけるプロンポグラフィの普及であるが、いずれにおいても根底にあるのは、制度よりも人間を見てゆこうとする関心である。

第一には、指導層の政治行動の分析として、グリュン「ローマ共和政期の最終世代」⁽⁴³⁾(一九七四)があげられる。著者は、スラの死からルビコン渡河までの約三十年の期間について、すべての関係者のプロンポグラフィを完全に整えた上で、政治的連合、官職就任、元老院の構成、民会の

立法活動、刑事訴訟の展開とその推進者などを、分析する。こうして諸制度が、逐一、それを担う人間を通じて検討される。これらの分析を展開しながら出てくる主張は、ローマの政治組織の解体などはなかったし、「ローマの革命」の観念は、歴史を回顧する場合の幻にすぎないということである。保守と革新のイデオロギーの対立は認められず、確実なことは、連合や提携によって、指導層が政治支配を維持することができたことであるという。

著者は、対象とする時代を考察するさいに、そのあとの時代の発展を考慮することを退け、同時代人の見方を復元して、一種の同時代史を書くことを目指している。このような研究態度には、興味も引かれるが、不都合な点もある。その後の変化を顧みないことにすれば、著者はローマ人の間で行われた見方をそのまま受け入れることになり、事態が動けば、偶然とか、個々の政治家の働きのせいとか、考えることになる。このような研究の特色と、プロンポグラフィ研究との間には、確かに幾らか関わりがあるだろうと、モランは述べている。モランによれば、三十年間ぐらいの短かい期間で政治の領域において、規模の大きな行動を問題にする時は、プロンポグラフィをもって説明が進むとは思われないとされており、政治の分野におけるプロンポグラフィ研究の限界の一つはその辺にあると指摘されている。

第二に、社会経済史における成果がある。プロソポグラフィ研究は、短い期間を取って政治の分析をする場合よりは、長い期間を取って集団の社会分析をする場合のほうが、効果をあげることができる。

ローマ共和政期の指導層のありかたは、古典的な研究課題であり、すでに古代人も、関心を寄せていた。「新人」という言葉は、一門の中で最初にコンスルに就任した人を指すものとして、古代でも用いられていた。ワイズマンの⁽⁴⁴⁾「ローマ元老院の新人、前一三九—後一四年」(一九七一)は、グラックス兄弟からアウグストゥスまでの期間の「新人」の各々について、出身地、親子関係、婚姻、財産、最高位に至るまでの官職昇進を、徹底的に調査したものである。この研究を通じて現われてくるのは、等質の社会集団ではなく、政治への関わりにおいて同系の人びとの集団というべきものである。また新人の昇進をめぐって、幾つかの立法の意義が明らかになった。すなわちガビニウスの投票法(前一三九年)やマリウスの選挙法(前一一九年)によって秘密投票が導入され、選挙のさいに貴族の影響力が抑制されることになったのである。もう一つ、ローマ市民権の付与ののち、イタリア都市の出身者が元老院に進出する様子も明らかにされた。市民権を得て三代目までに元老院議員になる者は稀であり、また出身地によって昇進に

差がある。また保護・被保護関係も重要で、マリウスやポンペイウスと同郷であることが、昇進に関わることもあった。さらに結婚の縁故についても考察がなされ、イタリア都市の有力者とローマ貴族の間の婚姻による結びつきを明らかにした。但し貴族層の中での名門と新参との区別は存続した。宗教や祭儀の役職は、新人の手には届かないところにあった。モランによれば、このようなプロソポグラフィ研究によって、制度がどのように働いたかの検討が可能にされたという。また公法の枠の中で、機会を利用したり、新しい可能性を追求したりする方策が、どのように進められたかを検討することも可能にされたのだという。

ニコレの「共和政期の騎士身分」(一九六六)⁽⁴⁵⁾も、同様な関心に発し、同様な分析を展開したものである。この著作の第一巻は、「法的定義と社会的構造」と題する七百ページを越える労作で、著者はこの社会集団の構造を分析し、従来の見解の正すべきものを正してゆく。騎士は土地所有者であり、地方都市の出身である場合が多いが、その活動は法律関係や自由業の分野が目立ち、実業にいそむる中産階級などというものではない。彼らは、政治的実利よりは威信と平穩を求める。この立論の基礎には、精密なプロソポグラフィ研究があつて、それは第二巻(一九七四)⁽⁴⁶⁾にこのような作業の模範というべき形で結実している。この巻は、

無味乾燥の付録の類ではなく、関係する人物についての興味深い情報が盛り込まれている。こうしてプロソポグラフィ研究は、事例研究や類型研究の域に接近するのである。

次に、ローマ社会において、指導層の内部では、富と社会的地位との間にどんな関係があつたか。シャッツマンの「元老院議員の富とローマの政治」(一九七五)⁽⁴⁶⁾は、この問題を問い、二百二十名の元老院議員について、資産、すなわち土地、財政活動、貸借、収入と支出に関する史料を収集し、経済的なプロソポグラフィというべきものをまとめた。この研究によると、元老院議員の富は、源泉は騎士と同じで、したがって両者の対立は、経済的利害の対立からでは説明できない。富は、政治的な地位に到達し、それを維持するのに必要ではあるが、それを保証する十分な条件ではない。このような研究において、プロソポグラフィ研究の成果が、比較的限られたものとなってしまふのは、富に関する指標は評価し難いということがあるためである。正確な数字や全体的な調査がないと、表に出たものや主観的な評価にとどまるのである。

さて指導層から遠ざかって下層民に向かう場合、プロソポグラフィ研究は成果をあげることが、いよいよ難かしくなる。ローマ社会の階層としては、解放奴隷は、騎士身分などとは趣きを異にするが、重要な意義を有する。彼らに

ついてトレジャリの「共和政末期のローマの解放奴隷」(一九六九)⁽⁴⁷⁾の労作がある。共和政末期の解放奴隷とその家族は、ローマ市民人口の七五ないし九〇%の多数を占めていたという。彼らのうちプロソポグラフィ研究の及ぶのは、きわめてわずかにすぎない。下層民については、プロソポグラフィ研究の限界はきびしい。

第三に、様々な分野におけるプロソポグラフィ研究の中から、三つの成果をあげる。

まずその一は、古典著作の真純性の批判に用いられた場合である。キケロにあてた手紙「立候補の心得」は、キケロがコンスルに立候補した時、その弟クイントゥスから寄せられた著作とされているが、真純性に疑いがあり、人によっては弁論術の演習論文ではないかと見られていた。その論点となるのは、用語の特色や心理的あるいは政治的な推測で、かなり主観的な要素がはいっている。ところがこの手紙についてプロソポグラフィ研究を行ったところ⁽⁴⁸⁾、著者はでたがための人名は一切あげていないのみならず、当時の政界に関わりのある人物を完全に知っており、それだけの知識を偽作者に帰するのは難かしいことが、明らかにされた。

その二は、考古学上の調査によって出てきた人名の確認がなされた場合である。マルセーニ沖のプラニエ島の漂着

物第三号の調査のさい、多数のつぼ(アンフォラ)と共に、船荷の中にポツォリからの染料の荷があった。陶器が多いので年代推定などは可能と思われたが、容易に解決しなかった。結局キケロ周辺の人物のプロソポグラフィ研究から、手がかりが得られたのである。アンフォラに、マルクス・トゥッキウス・ガレオという人物名と、その親子関係とトリプス所屬が記されていた。ところでキケロの手紙によると、前四七年にキケロは、ガレオという人の遺産を相続しており、またある友人からキケロにあてた手紙の中に、マルクス・トゥッキウスという人名が出てくる。さらにキケロにはウエストリウスという友人がいて、ポツォリで仕事を営んでおり、問題の船荷とは関わりのあるような活動をしている。このような仕事場の持主は、通商を営むこととは不思議ではないし、そのために友人と組んで、一方がポツォリで船を提供し、他方が西方の港まで航海するということも考えられる。さて今のキケロの手紙の中には、ある人物に対して、トゥッキウスとウエストリウスが共同して、訴訟を行ったことが述べられている。こうして、ポツォリのウエストリウスとその仲間のトゥッキウスが、キケロの周辺の人物であつて、問題の船荷の人名につながるべく考えると考えられるのである。

その三も、考古学的な調査とプロソポグラフィ研究との

連携の例である。キケロ周辺の人物のプロソポグラフィ研究によつて、アレツォにおいて製陶の仕事場の持主が、町の有力者になっているが、彼らは地元の貴族であつて、その多くはローマで元老院議員であつたり、元老院議員と関係のある者たちであつて、製陶も大土地所有者によつて営まれたもので、製陶によつて富を得た者が事業を拡大したというものではないことが明らかにされた。⁽⁵⁰⁾

4 研究の動向

プロソポグラフィ研究は、さまざまな試みにおいて成果をあげたが、研究の短所や限界も明らかになってきている。モランはそれらについてはストーンの前述の所論を顧み、ストーンの指摘がそのままローマ史のプロソポグラフィ研究にもあてはまると云っている。

すなわち、この研究には、資料のありかたに由来する限界がある。現存の資料の伝わりかたが、すでに偶然によつており、それも標本として代表的なものとは限らない。また資料は、上流階層に関して多く、下層に関して少ないから、研究の対象は選良に偏ることになる。

重要なのは、限られた資料にもとづく考察の結果を、一般化する場合に、どのくらいの有効性を保てるかという問題である。これは結局、標本の代表性の問題で、標本から

もたらされる情報が、どの程度、全体に対して適用されるかということである。モランはここで、調査の原則を述べるが、それは要するに、集団が等質のものから成るときは、標本は少なくてすみ、集団が異質のものから成るときは、標本は多く取るべきだということである。

調査の結果が、広く有効性を認められる場合もある。たとえば、碑文によつて、なんらかの官職経歴の意味合いを検討するような場合、関係者は等質、職務の引継ぎは客観的になされると見られ、碑文資料の伝わりかたに偶然はあつても、考察の適切さは損なわれない。

他方、なんらかの集団、家門や身分や党派などの、政治的、社会的、経済的な方策の展開などを問題にする場合、調査の結果の取扱いは、注意が必要になる。一つには、対象となる人びとの範囲がはっきりしないからであり、また、標本が代表的であるためには、なるべく多く、しかも散らばっているべきなのであるが、それが必ずしも十分でないことがあるからであり、また行動の原理は主観的であつて、対象となる個人や集団などの状況判断が関わっているということがあるからである。

プロソポグラフィ研究は、対象となる人たちを、等質と見る傾向がある。そして平均値やその周辺のところを重んじられ、偏差の大きいものは重んじられない。さらにその

ような傾向にそつて、研究者がみずから資料を組み立てて、「メタ資料」というべきものを用いて、作業を進めようとしたりするのである。

プロソポグラフィ研究の一環として、ローマ人の血統や婚姻をたどる調査がおこなわれ、ローマ人の命名法にもとづいて、各氏族や各家族の成員の確認が進められてきた。

このような調査においても、対象となる人びとを等質なものとして扱う傾向があり、また親子や婚姻の関係が直接に政治と結びつくとは限らないのに、調査にもとづいて、「この家族にしてこの政策あり」という整理をしてしまうことがある。これらのことは、この研究のおもむく傾向として、注意が必要である。

プロソポグラフィ研究の功績は、史料や情報の取扱いに精密の度を加えたことである。プロソポグラフィの調査作業そのものが、多方面の史料の渉獵と厳密な史料批判の上になり立ったものであり、その作業の結果をまとめたプロソポグラフィの基礎資料が、今後の研究の精密さを支えるものとなっているのである。

プロソポグラフィ研究は、歴史研究の一つの接近作業にすぎないとは云えるが、その本領とすべき社会的選良の研究のような一定の分野においては、それはこれからの歴史叙述においても不可欠のものとなるであろう、というの

がモランの結びの言葉である。

あとがき

この小論は、一九八七年度に本学の大学院史学専攻課程の「史学史」の講義が、西洋史の教員五名によって行われたが、拙稿時間のため用意した草稿は、このたび加筆したものである。同僚教員諸氏から、特に加筆をめぐって青木康氏が、御教示を頂へるごびびり、感謝いたします。

目

- (一) Lawrence Stone, *Prosopography*, Daedalus, 100, 1, 1971, 46-79.
- (二) Jean Maurin, *la prosopographie romaine: pertes et profits*, Annales E.S.C., 1982, nos. 5-6, 824-836.
- (三) C. Nicolet, *Prosopographie et histoire sociale: Rome et Italie à l'époque républicaine*, Annales E. S. C., 1970, no. 3, n. 3.
- (四) Dictionary of the National Biography, London, 1885-1900. この語彙は古来知られざる名士にのみ限る。
- (五) Pauly-Wissowa, *Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Stuttgart, 1893-
- (六) E. Klebs, H. Dessau, P. v. Rohden, *Prosopographia imperii romani*, 3 vols., 1897-98.
- (七) C.A. Beard, *An economic interpretation of the Con-*

stitution of the United States, New York, 1913.

- (八) A.P. Newton, *The colonizing activities of the English Puritans*, New Haven, 1914.
- (九) L.B. Namier, *The Structure of Politics at the accession of George III*, London, 1929.
- (一〇) R. Syme, *The Roman Revolution*, Oxford, 1939.
- (一一) R.K. Merton, *Science, technology and puritanism in seventeenth century England*, *Ostiris*, 4, 1938.
- (一二) M. Gelzer, *Die Nobilität der römischen Republik*, Leipzig, 1912.
- (一三) F. Münzer, *Römische Adelsparteien und Adelsfamilien*, Stuttgart, 1920.
- (一四) L.B. Namier, *England in the age of the American Revolution*, London, 1930.
- (一五) A. Momigliano, reviewing Syme in *Journal of Roman Studies*, 30, 75-80.
- (一六) L.R. Taylor, *Party politics in the age of Caesar*, Berkeley, 1949.
- (一七) E.Badian, *Foreign clientelae*, Oxford, 1958.
- (一八) K.B. McFarlane, *Bastard Feudalism*, *Bulletin of the Institute for Historical Research*, 20, 1947.
- (一九) J.E. Neale, *The Elizabethan House of Commons*, London, 1949, 24, 27.
- (二〇) T.K. Rabb, *Enterprise and empire: merchant and gentry investment in the expansion of England, 1575-1630*, Cambridge Mass., 1967.

(二一) D. Greer, *The incidence of the Terror during the*

French Revolution: a statistical interpretation, Cambridge Mass., 3, ed., 1964, 385-387.

同業の巨魁は、この本の出版を決定し、その出版に際しての出版費をこの一冊の出版にのみ支出した。

D. Lerner, I. de S. Pool, G.K. Scheller, *The Nazi Elite*, in H.D. Laswell, D. Lerner, *World Revolutionary Elites*, Studies in coercive ideological movements, Cambridge Mass., 1965, 194-318.

D.A. Rustow, *The Study of Elites*, *World Politics*, 18, 1966, 702.

(二二) H.R. Trevor-Roper, *The Gentry, 1540-1640*, *Economic History Review Supplement*, 1, 1953.

同業の巨魁は、この本の出版を決定し、その出版に際しての出版費をこの一冊の出版にのみ支出した。

D. Donald, *Towards a reconsideration of abolitionists*, in his *Lincoln reconsidered*, New York, 1956.
R.A. Skotheim, *A note on historical method: D. Donald's Toward a reconsideration of abolitionists*, *Journal of Southern History*, 25, 1959.

(二三) R. Syme, *op. cit.*, p. 7.

(二四) J.E. Neale, *The Elizabethan House of Commons, 1949*; Elizabeth I and her Parliaments 1559-1581, 1983; Elizabeth I and her Parliaments 1584-1601, 1957.

(二五) A. Momigliano, *op. cit.*, 76.

(二六) H. Butterfield, *George III and the Historians*, London,

1957, 211.

(二七) H. Butterfield, *op.cit.*, 208-209.

(二八) A.G. Dickens, *Lollards and Protestants in the diocese of York*, Oxford, 1959.

(二九) L. Stone, *Social change and revolution in England 1540-1640*, London, 1965, xi-xxvi.

L. Stone, *The crisis of the aristocracy 1558-1641*, Oxford, 1965.

(三〇) M. Clubb, *The Inter-University Consortium for Political Research: progress and prospects*, *Historical Methods Newsletter*, 2, 1969.

(三一) L. B. Namier, J. Brooke, *The History of Parliament: the House of Commons 1754-1790*, 3 vols., 1964.

R. Sedgwick, *The history of Parliament: the House of Commons 1715-1754*, 2 vols., 1970.

この書籍は、同業の巨魁にのみ限る。

(三二) W.K. Jordan, *Philanthropy in England 1480-1660*, 1959; *The charities of London 1480-1640*, 1960; *The charities of Rural England*, 1961.

(三三) W. den Boer, *Die prosopographische Methode in der modernen Geschichtsschreibung der hohen römischen Kaiserzeit*, *Mnemosyne*, 22, 1969, 268-280.
C. Nicolet, *op. cit.*, 1209-1228. (n. 3)

A. Chastagnol, *La prosopographie, méthode de recherche sur l'histoire du Bas Empire*, *Annales E.S.C.*, 1970, no. 5, 1229-1235.

- T.R.S. Broughton, Senate and senators of the Roman republic, the prosopographical approach, *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt (ANWR)*, I, 1, 1972, 250-265.
- H.G. Pluum, Quelques réflexions sur l'interprétation prosopographique, *Rheinisches Museum*, 115, 1972, 318-321.
- H.G. Pluum, Les progrès des recherches prosopographiques concernant l'époque du Haut Empire durant le dernier quart de siècle 1945-1970, *ANWR*, II, 1, 1974.
- A.J. Graham, The limitations of prosopography in Roman imperial history, *ANWR*, II, 1, 1974.
- (㉞) L. Canfora, Storia romana e teoria delle élites, *Quaderni di storia*, 1975, 159-164.
- (㉟) R. Syme, People in Pliny, *Journal of Roman Studies*, 58, 1968, 145.
- (㊱) T.R.S. Broughton, The Magistrates of the Roman Republic, 2 vols., New York, 1952; vol. 3, 1986.
- (㊲) H.G. Pluum, Essai sur les procurateurs équestres sous le Haut Empire romain, Paris, 1950.
- (㊳) G. Vitucci, Ricerche sulla praefectura urbi in età imperiale, Roma, 1956.
- (㊴) A. Chastagnol, La préfecture urbaine à Rome sous le Bas Empire, Paris, 1962.
- (㊵) J. Suolahti, The junior officers of the Roman army in the Republican period, Helsinki, 1955.
- (㊶) C. Nicolet, L'ordre équestre à l'époque républicaine, Paris 1966.
- (㊷) E. Groag, A. Stein, *Prosopographia imperii romani*, Neuaufage, 1933-
A.H.M. Jones, J. Martindale, J. Morris, *Prosopography of the Later Roman Empire*, 1977-81.
- (㊸) E.S. Gruen, The last generation of the Roman republic, Berkeley, 1974.
- (㊹) T.P. Wiseman, *New Men in the Roman senate*, 139 B.C.—14 A.D., London, 1971.
- (㊺) C. Nicolet, *Prosopographie des chevaliers romains*, Paris, 1974.
- (㊻) I. Shatzman, Senatorial wealth and Roman politics, Bruxelles, 1975.
- (㊼) S. Treggiari, Roman freedmen during the late republic, Oxford, 1969.
- (㊽) C. Nicolet et autres, *Le commentariolum petitionis de Q. Ciceron*, *ANRW*, I, 3, 1973, 239-277.
- (㊾) A. Tchernia, L'épave 3 de Planier, *Études classiques*, 3, 1968-70, 51-82.
- (㊿) T.P. Wiseman, The potteries of Vibiaenus and Rufrenus at Arretium, *Mnemosyne*, 16, 1963, 257-283.